

2015 年会優秀発表賞（富士電機賞）表彰報告

若手育成事業委員会

2015 年 9 月に行われた 2015 年会における研究成果発表の中から、優秀な発表を行った若手研究者・学生等に最優秀発表賞ならびに優秀発表賞（2015 年富士電機賞）が授与されました。以下、報告します。

最優秀発表賞（3 名）

①ポスドクおよび博士課程学生の部

佐尾博志（東京都市大学 環境学部）

受賞対象発表：「将来の社会状況下における南海トラフ巨大地震による住宅地被害額の推計：三重県のケース」

②修士課程（博士課程前期を含む）学生の部

白井浩介（東京大学大学院 工学系研究科）

受賞対象発表：「生産地による食品リスク認知構造の違いの把握と個人の特性による影響」

③学部学生・高専生・高校生等の部

田中柚衣（山梨英和高等学校 自然科学同好会）

受賞対象発表：「土壌生息酵母を利用した廃棄物からの土壌改質材生産に関する研究」

優秀発表賞（6 名）

①ポスドクおよび博士課程学生の部

徳村雅弘（横浜国立大学大学院 環境情報研究院）

受賞対象発表：「車室内ダスト中の指標元素を利用した FE-EPMA による汚染物質のスクリーニングと起源解析」

宮内達也（大阪大学大学院 工学研究科）

受賞対象発表：「ウェザージェネレータによる気象値の再現性が生態系プロセスモデルを用いた森林生態系機能予測に与える影響の評価」

②修士課程（博士課程前期を含む）学生の部

伊藤菜津生（横浜国立大学大学院 環境情報学府）

受賞対象発表：「島外依存と環境負荷の低減を目指した宮古島内バイオマス残滓循環システムのデザイン」

佐藤大起（名古屋大学大学院 環境学研究科）

受賞対象発表：「都市計画の変遷と建設系マテリアルストック・フローとの関係性」

③学部学生・高専生・高校生等の部

佐藤博紀（東京農業大学 地域環境科学部）

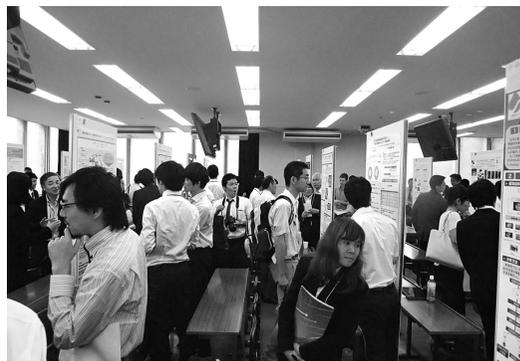
受賞対象発表：「多摩川源流域における気象・地形・植生の変遷に伴う年蒸発散量の変化」

杉原実乃佳（山梨英和高等学校 自然科学同好会）

受賞対象発表：「富士北麓地域のササラダニ類の多様性調査」

【賞の創設ならびに受賞者選考・表彰経過】

年会優秀発表賞（富士電機賞）は、環境科学分野の発展とその将来を担う創意ある若手研究者・学生等を育成・奨励することを目的として2008年に創設され、今年で8年目を迎えました。この趣旨にご賛同いただいている富士電機株式会社様に毎年ご寄付をいただき、年会優秀発表賞（富士電機賞）として表彰状ならびに副賞の授与を行っています。年会において発表を行うポスドクから高校生までの若手会員を対象に公募を行い、年会講演要旨集および当日のポスター発表について、年会に参加した正会員による投票を行った上で、若手育成事業委員会年会優秀発表賞選考委員らによる厳正なる選考審査を行い、受賞者を決定しました。2015年度は、ポスドクおよび博士課程学生の部、修士課程（博士課程前期を含む）学生の部、学部学生・高専生・高校生等の部のそれぞれから最優秀発表賞1名、および優秀発表賞2名が選ばれました。年会中に開かれた交流会での表彰式では、花木啓祐会長から受賞者一人ひとりに表彰状と副賞（図書券）が授与され、会場から大きな祝福の拍手が湧き上がりました。



ポスター発表の様子

【最優秀発表賞】

受賞者氏名：佐尾 博志（東京都市大学 環境学部）

受賞対象発表：「将来の社会状況下における南海トラフ巨大地震による住宅地被害額の推計：三重県のケース」

発表掲載頁：環境科学会 2015 年会講演要旨集, p.74

発表要旨：

2011年に発生した東日本大震災では、類を見ない被災地域の広さと被害を及ぼした。これは「大地震及び大規模な津波による広域の被害（直接的被害）」と「被災地以外への被害の波及（間接的被害）」が要因と考えられる。特に、後者は被災地の工業の停止によるサプライチェーンの寸断、全国各地で電力供給規制により、家計や企業に甚大な影響を与えた。この被害を踏まえて、内閣府は近い将来発生する南海トラフ巨大地震に対して、南海トラフ防災対策推進基本計画を策定した。この計画には、想定し得る最大クラスの被害に対して、人の命を守る・日本経済に致命的な被害とならないような対策を推進しており、ハード面では都市建造物の耐震化、ソフト面では防災訓練や防災教育等の対策を総合的に進めている。しかし、それらの対策を実施する前に事業の妥当性を考慮する必要があり、①いつ、どこで、どの程度の被害が発生するのか、②事前の対策によって被害がどの程度軽減できるか、を把握する必要がある。

本研究では、南海トラフ巨大地震による①の被害を算出するために、三重県を対象に2010年から2050年までの人口、世帯数及び住宅の変化を加味した住宅の需要量を推計するモデルを構築し、このモデルに南海トラフ巨大地震に伴う地震及び津波による被害を適用することで、各社会状況下における住宅の被害額の把握を目的とした。具体的には、まず、三重県の国勢調査等のオープンデータをもとに、2010年から2050年までの人口及び世帯数を推計した。住宅の需要量は2010年の住宅の延床面積を用いて、2050年までの住宅のライフサイクル（建替え、居住、廃棄）を推計し、各期間における社会状況を推計した。次に、地震及び津波の被害は内閣府の公表データを各期間における社会状況下に適用し、それぞれの住宅の被害額を算出した。

南海トラフ巨大地震による住宅の総被害額は2050年にかけて徐々に減少していく。しかし、地震による住宅の被害と津波による住宅の被害額に分けてみた場合、それぞれ異なる傾向を示した。地震による住宅の被害額は2050年にかけて徐々に減少していくが、津波による住宅の被害額は2025年まで徐々に増加し、その後ほぼ横ばいとなった。この違いについては、地震の場合、古い住宅が新しい住宅へ建て変わる際に、旧耐震化基準から新耐震化基準の住宅に自然と変わるため、地震による被害を受けにくくなる。これにより、地震の被害は減少を示す。一方、津波の場合、古い住宅が新しい住宅へ建て変わりによる住宅の耐震化を行っても、津波の被害を減少させることは難しい。なお、本研究では、高台移転のような津波対策を検討していないため、津波



佐尾 博志（さおひろし）
東京都市大学
環境学部

による住宅の被害額はほとんど変わらなかったと言える。また、地域別の住宅の被害額は比較的に人口の多い四日市市、津市、松坂市、伊勢市にて発生しており、これらの地域は沿岸部にあることから、地震と津波の両方の被害を受ける。このように、三重県における人口が集中している地域に地震及び津波の被害が発生するため、今後は短期的な視点、長期的な視点から対策を検討していく必要がある。

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会 2015 年会最優秀発表賞（富士電機賞）という大変名誉ある賞を頂きまして、誠にありがとうございます。また、研究発表の貴重な機会及び多くの研究者の方々との議論の場を与えて頂いた、富士電機株式会社様をはじめ、環境科学会の関係者の皆様には厚く感謝申し上げます。

本研究では、将来の社会状況下のもとで南海トラフ巨大地震が発生した際に、三重県における住宅への被害を算出しております。この研究はまだ発展途上であり、今後は、地震や津波の様々な減災対策をモデルに反映し、それらの対策を実施することで得られる減災効果を把握するとともに、適切な実施時期を考慮していくことを考えております。また、多くの方々から頂戴した有益なご意見をもとに、本研究を発展させるとともに、環境科学に貢献出来るように精進していく所存です。

最後ではありますが、本研究を進めていくに当たり多くのご指導及びご助言を賜りました東京都市大学大西 暁生准教授、牧歩 嵩氏、前田真佐樹氏には心より感謝申し上げます。また、本研究は環境省の環境研究推進費（課題番号：3K143015）の支援により実施されており、代表者の神戸大学田畑智博准教授、分担者の皆様には厚く感謝申し上げます。

【最優秀発表賞】

受賞者氏名：白井 浩介（東京大学大学院 工学系研究科）

受賞対象発表：「生産地による食品リスク認知構造の違いの把握と個人の特性による影響」

発表掲載頁：環境科学会 2015 年会講演要旨集, p.16

発表要旨：

本研究では食品の産地に着目し、そのリスク認知構造の違いを明らかにすると同時に、リスク認知との関連が示唆されるパーソナリティ（個人特性）による影響を合わせて評価することを目的とした。

構造評価に必要なデータはアンケート調査により取得し、対象とする食品は、福島県産農産物と中国産加工食品とした。事前調査において、国内産では未だ福島県産の食品に対して不安感が残ること、海外産食品では中国産の食品に対して不安感が高いことが示されたためである。調査対象者は、東京都在住の 20 代～70 代の男女とし、計 2400 の回答を得た。調査はオンラインアンケート（クロスマーケティング）により 2015 年 5 月 11 日～14 日に実施した。

不安感の絶対値（6 件法：1～6）は中国産加工食品（5.06）の方が福島県産農産物（3.34）より大きくなった。両品目において、不安感と購買意図、不安感と購買行動に負の、購買意図と購買行動に正の強い相関が見られた。リスク認知因子としては、両品目で共通して、「恐ろしさ」「病因性認知」「社会的未知性」「個人的未知性」の 4 因子が抽出された。「病因性認知」は体内に蓄積する、治療回復が難しい、といった質問で構成され、食品に特有の因子と考えられる。各食品購入時に想起するイメージは、福島県産農産物では「特に思い浮かべない」、「チェルノブイリ原子力発電所事故」の順に、中国産加工食品では、「残留農薬」が最も多かった。個人特性について因子分析を行った結果については、事前調査において不安感に強い影響を与えていた「一般的信頼性」「規律主義」等の 8 つの因子が事前調査同様抽出された。

これらの結果を基に両産地に対して共分散構造分析を行った。福島県産農産物に対する結果を図 1 に示した。両品目で、「恐ろしさ」が不安感に直接大きな影響を与えていた。また、未知性として科学的に



白井 浩介(しらい こうすけ)
東京大学大学院
工学系研究科

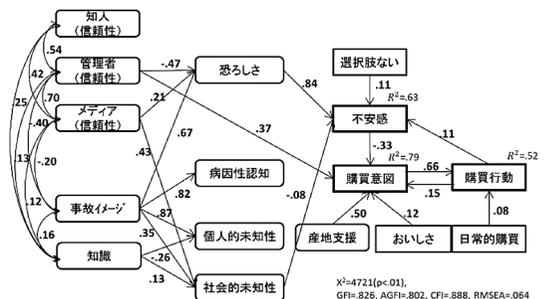


図 1 福島県産農産物のリスク認知構造

解明されている、といった「社会的未知性」のみが不安感に負の影響を与えており、影響の仕組みがわからない、といった自身の理解に関わる「個人的未知性」による影響は見られない。また、「管理者」に対する信頼性が直接不安感を下げ、購買意欲を上げており、信頼性が重要なのが確認できる。また、イメージによるリスク認知因子への影響も大きく、その食品自体の認知以外のイメージがリスク評価に影響を与えることがわかった。

パーソナリティでは、福島県産農産物で「一般的信頼性」の高い人は低い人に比べ、「社会的未知性」から「不安感」のパス係数の絶対値が大きく、他人を信頼する傾向にある人ほど、そのリスクが社会的に知られていると不安感がより低減されるといえる。また、最も信頼性の低かった主体として日本政府を取り上げると、主体への信頼性は一般的信頼性の高い人は主体の「公正さ」と、低い人は主体との「価値類似性」と相関が大きく、パーソナリティによる信頼性の要因の違いも示唆された。

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会 2015 年会最優秀発表賞（富士電機賞）という名誉ある賞を授与していただき、誠にありがとうございます。富士電機株式会社の皆様、審査いただいた正会員の皆様、加えて、当日ポスター会場にて有益なご意見をくださった多くの方々に厚く御礼申し上げます。発表中にいただいた多くのご意見は、今後の研究の強い励みとなりました。

「環境」を対象として研究を進めるうえでは、俯瞰的で学際的な視点が必要であると考えており、今回の研究を始めてからも、自身は工学の分野に所属しながら心理学に非常に近い内容を扱うということで、文理の垣根をこえて両者の強みを生かすにはどうしたらよいかと考えながら進めて参りました。また、研究として当然のことではありますが、特定の産地の食品を対象としているということもあり、常に中立の立場に立って分析を行い、客観的な結果にこだわっていくという姿勢は強く意識していました。学問領域だけでなく、研究と社会とを広くつないでいく環境科学という分野は非常に魅力的で、その発展に微力ながら力添えできたとすると、これほど光栄なことはありません。

今後も最優秀発表賞という名に恥じぬよう、さらに努力していきたいと考えております。最後に、研究を進めるにあたっていつも熱心に御指導していただいております東京大学の花木啓祐教授、栗栖聖准教授に心より感謝申し上げます。

【最優秀発表賞】

受賞者氏名：田中 柚衣（山梨英和高等学校 自然科学同好会）

受賞対象発表：「土壌生息酵母を利用した廃棄物からの土壌改質材生産に関する研究」

発表掲載頁：環境科学会 2015 年会講演要旨集，p.100

発表要旨：

私達は各種廃棄物を再生可能資源として有効利用し環境負荷を減らすことを目指している。今回は果樹大国山梨で大量に発生する非出荷モモからの搾汁液（廃棄果汁）および天ぷら油から BDF を生成する際に副成される廃グリセリンの有効利用について検討した。昨年度は、油脂酵母であるリポミセスを用いての廃グリセリンからの油脂生産を試みたが、十分な量の油脂は得られなかった。今年度は、土壌生息微生物は多糖を生産することに着目し、廃棄物（廃棄果汁および廃グリセリン）を炭素源とした培地で、土壌生息酵母であるリポミセスを培養して得た多糖の土壌改質効果について実験をおこなった。

A) リポミセスが廃棄物から生産した多糖を用いた植物栽培試験（図 1）：保水力や保肥力が劣る砂質土壌に多糖を加え、幾つかの植物を植え付けた。多糖を入れることによって生育に影響が現れ、多糖の量を増やせば多糖の効果は明確に発現した。これは、土壌が水分を含んでいるため乾燥に強くなったと考えられた。そこで、リポミセスの培養液で栽培実験を行ったところ、同様の結果を得た。

B) 保水力・保肥力試験：土壌に多糖を添加すると多糖そのものが保水剤としての効果があり、また土壌粒子を結合して団粒化を誘導するため多孔質化が起これ、これによっても保水力や保肥力が高まり更に通気性も高まることが推定された。このことを確かめるため実験による検証を試みたところほぼ推定は正しいことがわかった。

C) 多糖の生産：土壌生息酵母リポミセス (*Lipomyces kononenkoae*) を用いて廃棄モモ果汁および廃グリセリ



田中 柚衣（たなか ゆい）
山梨英和高等学校 2 年

ンを唯一の炭素源とする培地で培養した。廃グリセリンは微生物の生育に悪影響を及ぼす夾雑物の除去及び pH 調整を行ってから使用した。培地にはこれら炭素源以外に無機・有機の成分を添加した数種類のものを用意し、生育や多糖生産に及ぼす影響を調べた。その結果、培地成分はリポミセスの生育に強く影響を与えていることが分かり、本格的にこの多糖を生産しようとした場合は、廃棄物を利用していることを考慮すると、処理コストがかかる廃グリセリンより、廃棄モモ果汁の方が優れていると考えられた。また、炭素源以外に添加するものとしては、廃棄されるキャベツの外葉を使ったジュースが多糖生産の効果とコストの両方に優れていると結論された。

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会 2015 年会最優秀発表賞（富士電機賞）を授与していただき、誠にありがとうございます。受賞できるとは思ってもいなかったのでも驚いています。研究を進める上で大変だったことは、植物を扱って実験をしたので、周りの環境に左右されやすく、また個体差もあり、安定したデータをとることに時間がかかったことです。また、少ない人数で昼休みや放課後などの短い時間の中で実験を進めることが難しい時もありましたが、その中で努力した結果が今回の賞に繋がったものと思うと、とてもうれしく、これからの大学受験を来年にひかえた日々の学習と研究との両立にも今まで以上に意欲がわいてきます。

学会当日は、周りの方々は大学の方々ばかりという中で発表させていただくことに、とても緊張しましたが、発表させていただく中で多くのアドバイスをいただき、大変勉強になりました。気が付くと、研究内容をわかっていただくことに集中している自分がありました。この研究は、私たちが1年生の時から始めたので、研究を始めて今年で2年目になります。今回このような賞を受賞できたことは、私たちの研究生活にとって大きな自信となりました。今回の受賞を励みに、たくさん頂いたアドバイスを生かして今後も研究の発展・充実を図ってきたいと思います。

最後に、研究に対して多くのご指導をいただきました、山梨大学の長沼孝文先生、研究室の皆様、ならびに山梨英和高校の御園生真美先生、山本紘治先生に心から感謝申し上げます。

【優秀発表賞】

受賞者氏名：徳村 雅弘（横浜国立大学大学院 環境情報研究院）

受賞対象発表：「車室内ダスト中の指標元素を利用した FE-EPMA による汚染物質のスクリーニングと起源解析」

発表掲載頁：環境科学会 2015 年会講演要旨集, p.79

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会 2015 年会優秀発表賞（富士電機賞）という名誉ある賞を頂き、大変光栄に思います。富士電機株式会社の皆様を始め、公益社団法人環境科学会の皆様に厚く御礼申し上げます。

本研究は、私が今までに経験したことのない装置を用いたり、データの解析を行ったりする必要がありました。そのため、非常に多くの方々に協力して頂きながら研究を進めてまいりました。まず、車室内ダストサンプルの採取には、車の持ち主の方々を始め、横浜国立大学の畑山瑠莉香様、株式会社いすゞ中央研究所の達見一様、内藤敏幸様、竹田哲也様に多大なお力添えをして頂きました。リン系難燃剤の測定では内藤加奈子様の熱心なご協力がありました。電界放射型電子プローブマイクロアナライザ（FE-EPMA）による測定では、横浜国立大学の根岸洋一先生、山取由樹様にご尽力を賜りました。そして、横浜国立大学の田村真由美様には多くの事務的な難題について対応していただきました。皆様のご協力のお陰で、私一人では成し得ない、分野横断的な研究を行うことが出来ました。この場をお借りして御礼申し上げます。

この度の受賞を励みにして、今後も研究者として、より一層精進して参ります。今後とも、皆様のご支援と



図 1 多糖を用いた植物栽培試験



徳村 雅弘（とくむらまさひろ）
横浜国立大学大学院
環境情報研究院

ご協力を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。最後に、研究を進めるにあたり、多くのご助言、ご協力に加え、このような非常に恵まれた研究環境を提供して頂いた、横浜国立大学の益永茂樹先生に心から感謝申し上げます。

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：宮内 達也（大阪大学大学院 工学研究科）

受賞対象発表：「ウェザージェネレータによる気象値の再現性が生態系プロセスモデルを用いた森林生態系機能予測に与える影響の評価」

発表掲載頁：環境科学会 2015 年会講演要旨集, p.25

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会 2015 年会優秀発表賞（富士電機賞）を授与していただき、誠にありがとうございます。当日の発表にて貴重なご意見を下さいました多くの方々に心より感謝申し上げます。

本研究では、生態系内の物質循環をシミュレーションすることが可能な生態系プロセスモデルを用いた将来予測の前段階として、ウェザージェネレータによって確率的に生成された入力気象値がモデルの出力値や物質循環過程にどのような不確実性を与えるかを評価しました。

私の研究は、最終的な目標として生態系の持つ多様な機能の評価ツールとして広く活用していただくことを考えています。そのため環境科学会という非常に広い分野を扱っている学会で多様な視点からの意見を頂くことができればと思います。今回の発表に至りました。ウェザージェネレータや生態系プロセスモデルなど他分野の方が聞き慣れないツールを使っていますので、あまり興味を持ってもらえないのではないかと発表前は緊張していましたが、当日は多くの方から質問やご意見を頂くことができ、非常に有意義な時間となりました。皆様から頂いたご意見は今後の研究に活かしていきたいと思っております。



宮内 達也(みやうち たつや)
大阪大学大学院
工学研究科

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：伊藤 菜津生（横浜国立大学大学院 環境情報学府）

受賞対象発表：「島外依存と環境負荷の低減を目指した宮古島内バイオマス残滓循環システムのデザイン」

発表掲載頁：環境科学会 2015 年会講演要旨集, p.89

受賞者からの一言：

この度は、年会優秀発表賞（富士電機賞）を受賞させていただき、ありがとうございます。また研究発表の貴重な機会を与えてくださいました公益社団法人環境科学会の皆様および学会関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

今回の発表では、農畜産業資材の島外依存と地下水汚染という課題を抱えた宮古島において島内バイオマス残滓を循環利用するシステムをデザインし評価することを目的としました。異なる栽培管理のサトウキビ畑における炭素・窒素フロー解明や地下への無機態窒素溶脱量の実測等を行い、バガスや堆肥化牛糞の農地還元がもたらす環境負荷や島外依存の低減および単収向上などの効果を定量的に評価した成果をご報告させていただきました。今後は、繁殖牛に係る物質収支と合わせたくうえて、バイオマス残滓循環システムの評価を行い、より宮古島に還元できる研究を目指していく所存です。

今日までを振り返ってみますと、研究対象とするサトウキビ畑の選定やデータの整合性があわないことで頭を悩ませた日々も多くありました。しかし、同じ研究室の学生がサンプリング補助をしてくれただけでなく多くの助言をくれ、何より現地の方々の温かい励ましの言葉が私の支えとなり、困難を乗り越え、本賞を受賞出来たと確信しております。本当にありがとうございました。

最後に、研究を進めるにあたり多大なるご指導を賜りました横浜国立大学の藤江幸一教授、亀屋隆志准教授、小林剛准教授、東京農業大学の橋隆一准教授、及び研究室の皆様方に心より感謝申し上げます。



伊藤 菜津生(いとう なつき)
横浜国立大学大学院
環境情報学府

【優秀発表賞】

受賞者氏名：佐藤 大起（名古屋大学大学院 環境学研究科）

受賞対象発表：「都市計画の変遷と建設系マテリアルストック・フローとの関係性」

発表掲載頁：環境科学会 2015 年会講演要旨集, p.84

受賞者からの一言：

この度は、2015 年会優秀発表賞（富士電機賞）という素晴らしい賞を授与して頂き、誠にありがとうございます。また、研究発表の貴重な機会を与えてくださいました環境科学会関係者様をはじめ、富士電機株式会社様、研究発表の際に助言を頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。

本研究では、循環型社会形成に向けた、現在まで投入・蓄積されてきた資源量の空間的な分布、時間的変化の可視化、建物更新の分析を目的として、北九州市小倉北区と戸畑区を対象に、建設系マテリアルストック・フローの推計・考察を行いました。GIS（地理情報システム）を時系列で用いる手法により、詳細な分析を可能としました。道路のストックに大きな変化は見られないのに対して、建築物のマテリアルストックは増加傾向にあり、特に鉄筋コンクリート造への資材投入量が高い割合を示す結果となりました。この研究が循環型社会形成に貢献できるよう、2015 年会への参加と優秀発表賞受賞を励みに、これまで以上に研究活動に邁進していきたいと思っております。

最後に、日頃からご指導頂いております名古屋大学谷川寛樹教授をはじめ奥岡桂次郎助教、貴重なデータを提供してくださいました北九州市立大学深堀秀敏様、研究を進めるにあたりサポートして頂いた研究室のメンバーと関係各位に心より感謝申し上げます。



佐藤 大起（さとう ひろき）
名古屋大学大学院
環境学研究科

【優秀発表賞】

受賞者氏名：佐藤 博紀（東京農業大学 地域環境科学部）

受賞対象発表：「多摩川流域における気象・地形・植生の変遷に伴う年蒸発散量の変化」

発表掲載頁：環境科学会 2015 年会講演要旨集, p.96

受賞者からの一言：

このたびは、年会優秀発表賞を受賞させていただき、誠にありがとうございます。多くの専門家の方々と交流の機会を与えてくださった公益社団法人環境科学会の皆様及び学会関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

私の研究室では多摩川流域の水収支やその変遷、森林の樹冠遮断量と蒸散量の測定に取り組んでおります。今回の発表では、およそ 200 km² の多摩川の小河内ダム流域を対象とし、過去 70 年間分の面的な蒸発散量の推定を目的としました。その結果、蒸発散量は降水量のおよそ 2 割～3 割程度となることが分かりました。また、森林の荒地面積が年数の変化に伴い減少していき、それが蒸発散量に影響を与えることが言えました。

学会での発表を通して、データの整理・見せ方や発表の方法について学びました。また、多くの方々から改善点についてご助言をいただきました。一方で、卒業論文の途中経過を発表する形であったため、不完全な発表となってしまいました。そのため、今後とも継続的な調査・解析を進めて、一層研究に励んでいきたいと考えております。

最後に、この場をお借りして、本学会でお世話になりました、富士電機株式会社様、学会員の皆様、学会事務局の皆様に御礼申し上げます。そして研究を進めていく上でお世話になりました、東京農業大学の橘隆一准教授、福永健司教授、ご助言をいただきました下嶋聖助教、作業を手伝っていただいた治山緑化学工研究室の方々に感謝申し上げます。



佐藤 博紀（さとう ひろき）
東京農業大学
地域環境科学部

【優秀発表賞】

受賞者氏名：杉原 実乃佳（山梨英和高等学校 自然科学同好会）

受賞対象発表：「富士北麓地域のササラダニ類の多様性調査」

発表掲載頁：環境科学会 2015 年会講演要旨集, p.97

受賞者からの一言：

この度は環境科学会 2015 年会優秀発表賞（富士電機賞）を授与していただき、誠にありがとうございました。学校の理科室の小部屋で毎日少しずつ続けている私たちの活動を認めていただき、本当にうれしく思っています。

この研究を進める上で最も大変だったことは、ダニを同定することと、集計したデータをグラフ化することでした。前回まで調査していた学校近くの山とは違い、富士山麓はダニをはじめとする土壤動物がとても多く、図鑑片手に特徴を話し合いながらの同定作業はとて時間がかかりました。また、データのグラフ化では、グラフの種類を何度も変えてどれが見やすいかを考えるのが大変でした。どちらの作業も細かくて大変でしたが、やり終えたときにはとても達成感がありました。

このような発表は今まで数えるほどしかしたことがなかったので、当日まで上手に説明をしたり質問に答えたりできるかと不安で一杯でしたが、発表を見てくださった方々から貴重な御意見を頂けたので、いつの間にか不安な気持ちは消えていました。頂いたアドバイスは、今後の研究に生かしていきたいと思います。これからも富士山のダニの研究を続けていきたいです。また、後輩にも長く引き継いでもらいたいと思っています。

最後に、研究に対して多くのご指導をいただいた山梨英和高校の山本紘治先生、御園生真美先生に心から感謝申し上げます。



杉原 実乃佳(すぎはら みのか)
山梨英和高等学校 2 年